

今日は地球で最後の夜。もう数時間後には、銀河列車に乗って、地球を離れることになる。良 太と瞳との地球での最後の逢瀬だ。スクランブル交差点や商店街などでは、夜中過ぎだという のに、まだ多くの人で賑わっている。いや、溢れていると言った方がいい。

これまで閑散としていたシャッター街の商店街においても、人々は、別れを惜しむかのように、 記憶に焼き付けるかのように、通りを彷徨っている。カメラやスマホなどで映像を記録している 人もいる。これまで見向きもしなかった何の変哲もない小石や砂、土などを記念品のようにビニ ール袋に入れている人もいる。

そんな人たちを尻目に、良太と瞳は人とぶつからないように、できるだけ壁沿いの道の端を通る。それでも、人波に飲み込まれそうだ。だから、良太は彼女の手は離さない。瞳も彼の手を強く握り締める。

## 「ここだ」

二人が着いたのは高層ビルの下に広がる公園。ビルの前には、ビルに入ろうとしている人で一杯だ。また、遠目からでもビルの中はガラス越しからでも人が溢れているのがわかる。その中で、置き忘れられたように公園があった。誰からも見向きされない公園。その公園の椅子に座る二人。

空を見上げる。高層ビルに切り取られた四角い暗い空を見つめる。反対に、高層ビルは煌々とした明かりだ。多分、夜が明けるまで電気は灯され続けるだろう。その先には、手前のビルの明かりに遮られながらも、漆黒の闇の空に、星が瞬いている。

「新地球って、あれ?」

「あれは、月だよ。それに、新地球は光らないよ」

「じゃあ、新月はどこ?月は光るんでしょう?」

「新月も光らないよ。太陽に照らされて明るくなるだけだよ。それに、新月はここからかなり遠いから見えないよ」

「じゃあ、新地球も見えないの?」

「そうだね」

「つまんない」

「銀河列車に乗れば見えるよ」

「じゃあ、明日になれば見えるかなあ」

「もう、今日だよ。でも、銀河列車が新地球に到着するには何日もかかるからなあ」

「その銀河列車だけど、あたしは三番目に出発する地球号。あなたは?」

「僕は最終便さ」

「一緒じゃないのね。つまんない」

「でも、新地球では会えるよ」

「最後の地球の夜ね」

瞳は良太の手の五本の指の間に自分の指を滑り込ませた。良太はその手を畳むように握った。

「そうだね。通りでも、高層ビルの中でも、多くの人が別れを惜しんでいるよ」

「でも、みんな変なの」

「なんで変なの」

「だって、今日という日が来ることはみんなわかっていたんでしょう。今更、その日が来たから と言って、急に、地球が愛しいなんておかしいよ」

瞳は高層ビルの各階や入口のエントランスで大騒ぎをしている人々を凝視している。

「そうだね」

「道路にはごみが散乱しているし、川や海にも、ごみが垂れ流されているじゃないの。地球が愛

しいのならば、最後の日に浮かれるのじゃなく、最後の日だからこそ、もっとすることがあったんじゃないの。これじゃあ、ごみと一緒に地球を捨てていくことになるのよ。どうせ、新地球でも同じことがおきるわ」

彼女の語気がどんどんと荒くなり、握り締めた手も力が強くなる。

「そうだね、もっとすることがあったのかもしれないね。でも、今からでも遅くはないよ。僕たちは、自分ができることをやればいいし、新地球でもやらないといけないよ。そして、それを次の世代にも伝えていかなければならない」

「ええ。そうね」

良太は立ち上がると、ポケットから軍手を取り出して、瞳にも渡し、手に装着した。また、ごみ 袋も広げた。

「街をきれいにしよう」

「わかったわ」

二人は公園から通りに出た。もうすぐ夜が明ける。新地球への出発の時間が、地球を立ち去る時間が刻一刻と近づいてくる。

名残惜しいのか、人々は家にはまだ帰ろうとせず、街に溢れていた。缶ビールや缶ジュースの空き缶、飲み干されたペットボトルなどが至る所に捨てられている。また、スナック菓子の袋などが散乱している。

## 「邪魔だ」

人々は空き缶などを蹴飛ばしたり、踏みにじったりしている。そうしたごみたちは、道路の隅 に追いやられる。

良太と瞳は、空き缶などを拾うと、自動販売機の横に設置されているごみ箱に入れた。もちろん 、自動販売機を設置した飲料会社が今日、その缶を回収に来ることはない。それでも、二人は、 歩きながら空き缶やペットボトルなどを拾っては片づけていく。それ以外のごみは手持ちのビニ ール袋に入れる。

街のコンビニや飲食店では、今日から店を閉ざすため、無料で、食料品やファーストフードなど

を配布している。それがごみの散乱に拍車をかけている。二人は騒いでいる人たちの合間を縫って、次々とごみを拾っていく。家まで後五キロ。多分、朝日が昇るまで、二人は帰れないだろう。